

専念寺通信

専念寺通信

十二月号 (NO. 100)

<http://sennenji.s296.xrea.com/>

今年もいよいよ師走、時のたつのは本当に早いものです。今月号は『専念寺通信』が100号となりました。平成12年7月に第1号を発行し、今年で足かけ9年、とうとう100号を迎えることができました。これもご来寺くださり、読んでくださる檀家さまのおかげです。こころより感謝申し上げます。

☆『専念寺通信』について

『専念寺通信』は、先代大黒が亡くなって数ヶ月後、檀家さまと少しでも近づきたい、何かしらの交流をしたいと思って始めました。大黒自身の勉強も足りませんでしたし、亡くなった先代住職の書庫にあるたくさんの書物を調べて、書きつづりました。以下に1号以来の内容を少しだけふりかえってみます。

☆南無阿弥陀仏の意味について第2号で書きました。阿弥陀の原語はサンスクリット語アミターユスあるいはアミターバであること。このふたつの語を音訳したものが阿弥陀で、アミターユスは「無限の(アミタ)寿命(アーユス)を持つ」という意味で無量寿と訳されたこと。アミターバは「無限の(アミタ)光(アーバー)を持つ」という意味で無量光と漢訳され、南無は「帰依する」「心から信じてゆだねる」という意味で、仏は「真理に目覚めた人」の意味である。したがって南無阿弥陀仏は、次のような意味になること。「私は無限のいのちと無限のひかりを信じます。」

☆卒塔婆について第4号で書きました。語源はサンスクリット語のストゥーパで、その音をうつしたこと。板の上の部分に五輪塔の形にし、下から、方、円、三角、半円、宝珠、のかたちで切り込まれていること。卒塔婆を「お塔婆」といいますが書かれている5つの梵字は上から順にキャ、カ、ラ、ヴァ、ア、と読み、その意味は順に、空(くう)、風、火、水、地であること。

☆浄土宗の総本山については第6号にあります。総本山は京都の知恩院で、

その他に七大本山として、東京の増上寺、京都の金戒光明寺、京都の知恩寺、京都の清浄華院、福岡の善導寺、神奈川の光明寺、長野の善光寺があること。

☆「方丈」と住職を呼び、住職の妻を「大黒」と呼ぶのはなぜかについて(第3号と7号)。「方丈」はもともと寺院の座敷のことで、一丈(約3メートル)四方の正方形の部屋に寝泊りしていた維摩居士が、この方丈の間で生活しながら無限の境地を持っていたことにちなみ、住職の尊称となったこと。「大黒」はシナの僧義浄三蔵が671年にインド各地を遊学したおり、「食厨の柱側」にあり、「二尺三尺にして、黒色をなす」大黒神があったと記しており、この記述から大黒は厨房の守り神、のちに庫裏(寺の施設)を守る人の名になったと。

☆おしゃかさま、という呼び名については第10号にあります。「釈迦」とはインドとネパールの国境地方に住んでいた一部族の名前で、シャーキャ族出身の聖者(ムニ)という意味で、仏教の開祖ゴータマ・ブッダは、シャーキャ・ムニと呼ばれ、これに漢字をあて「釈迦牟尼」としたこと。

☆檀家さまからのご要望で「日常勤行式」を第12号から18号まで連載しました。その後9・11事件の際は法然上人の父の遺言を掲載し、「報復」の無意味さを記しました(第17号、27号)。その後、「神と仏」(第19号から22号)、檀家さまのエピソード(第25号から38号)、折りにふれ、いくつかの法然上人の言葉や「一枚起請文」(第55号)をご紹介します。一年間の留守のあいだは「欧州通信」(第58号から69号)を書きました。第77号から写真入りとなり、専念寺境内の樹や花を掲載し、また、2度の号外、『大黒通信』では、環境問題や世界平和について訴えました。第94号では「人間の驕り」と題して、人が自然を支配しようとするものの不遜さに触れました。常に、仏教にいう「愚者」の目線で、そのつど世界で起こっていることについて書かせて頂きました。まだまだ書き続けます。今後ともよろしく願いいたします。

どうぞ皆さま、お健やかに良いお年をお迎えください。

平成20年12月1日

大黒

